琉球大学学術リポジトリ

コメント1．コメント2

| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科<br>公開日: 2016-02-17<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 野入, 直美, 堀, 勝彦, Noiri, Naomi, Hori, Katsuhiko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002008218 |

観光科学　第 7 号　（平成 27 年 12 月）　pp.69-71
Journal of Tourism Sciences. Vol.7 (December.2015)

# コメント 1

野入　直美 *
Naomi NOIRI

観光科学研究会という場でコメントを述べさせていただけることを光栄に思います。越智先生から事前にお送りいただいたレジュメを読んでまず感じたことは、こういう未完成の要素をはらんだ、論争を喚起する研究報告というのは、少なくとも社会学の学会ではもうほとんど聞くことができないなということでした。越智先生のご報告は守りの姿勢というものが希薄で、議論に向かって開かれたご報告だと感じました。こういうご報告がここで成り立つということは、越智先生のご研鑽のたまものなのですが、オーディエンスである同僚の先生方への質の高い信頼というものを感じました。他学部に属するものとして、このような研究会が継続的に開催されていることにまず心からの敬意を表したいと思います。

ご報告は、「公共性」というコンセプトに引き寄せることで、観光社会学が、観光を題材とした従来の社会学から脱し、観光科学の実践的な一領域としての観光社会学へと展開していく可能性を検証する、挑戦的で論争喚起的なもので、たいへん興味深くうかがいました。そこで試みられていることは、サブタイトルにある「観光社会学の現代的再定位」ということかと思います。

現代における観光社会学とはいかなる営みたりうるのか。この問いをめぐって最初に浮かんだ疑問は、観光という営みそのものに対する批判的なパースペクティブというものは現代の観光社会学には位置づかないのかな、ということでした。越智先生がレビューされた先行研究の最初にそういう系列のものが出てきますが、すぐにトレンディーではなくなっていきます。その理由もよくわかるので、たぶん、このご報告を聞いているこの場所が沖縄でなければ、観光に対する批判的な視点という論点が私の中でも浮上してこなかったと思います。

地域性という変数を敢えて、たぶん敢えてだと思うのですが、盛り込んでおられない越智先生のご報告に対して、見当はずれなコメントになってしまうかもしれないのですが、私は、沖縄で観光社会学を考えるのであれば、そこにポストコロニアリズムや反グローバリゼーション、格差や貧困をめぐる議論はなんらか入れざるを得ないのではないか、そして、そのような論点や批判の視点を含んでこそ、公共性をめぐる議論がさらに膨らむのではないかという気がします。

私自身は京都で、金閣寺のわりと近くで生まれ育ち、つねに生活圏内で観光客を見かける環境で過ごしてきました。そして沖縄へ来て、沖縄の学生たちが観光客、とくにわナンバーの車両に対して示す侮蔑や反感の鋭さに驚きました。それは私が京都で、観光客に対して抱いたことのないような類のものだったからです。沖縄の学生の意識は、ナイチャーに対する意識なのですが、観光という営みにおける、観光する側と観光される側の非対称性が、否定的な意識を増幅しています。基地依存経済について授業すると、同じ学生たちが、沖縄の自立経済のカギは観光だと書きます。しかし、実際に大学を卒業して、ぜひ観光業で働きたいと希望する学生は、控えめに言ってもそんなに多くはない。条件が悪いだけでなく、誇りをもって働くことが難しそうな、まさに公共性というものからちょっと距離がありそうなイメージがあるようです。一方に、越智先生が「非常にナイーブな」とおっしゃった、観光で社会によい効果があるだろうという価値自由でない期待があり、もう一方に、非対称性、公共性からのアウェイ感があり、その真ん中の実質的な部分が弱い。越智先生のお仕事はこの真ん中を埋めることであり、そこに越智先生のお仕事の意義があると思います。

* 琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻

3.3 の「観光社会学と公共性」、3.4 の「観光社会学と観光科学」では、非常に興味深い議論が展開されています。観光があろうがなかろうが、私たちが生きている現代社会では、圧倒的な市場経済の力が私たちを分断し孤立させている。そして、観光というものは、何もかもを観光資源化、商品化してしまうという批判を受けるけれど、それは公共性を保障していない場合にそうなってしまうということであって、観光資源化や商品化そのものが否定されるべきではない。むしろ観光を通じて、地域の人たちが今まで目に入ってはいたけれど異化されてこなかった地域のものごとを、「可能性の束」として見出したり、それに対する外部からの働きかけに対して違和感を覚えたり、そこで地域の人どうしで相互行為があったり対外的な交渉やコンフリクト、ヘゲモニー争いなどを含んだ相互行為が生じる、そういう複雑でダイナミックな相互行為の契機として観光を積極的に位置づけておられる点が、非常に魅力的だと思いました。社会システムと生活世界のズレは、日常生活では言語化されたり意識化されたりすることはそんなにないのですが、観光を通じてそれが鋭く知覚される。そこからインタラクションが始まる。ここで観光と公共性はつながるんですね。さらにご報告は、そのつながりを見いだしそれを研究することに留まらず、そのつながりにコミットメントをしていく、その実践性、能動性というのが非常に今日的な意義を感じさせるものでした。ただ、どういうときに公共性が保障された持続可能な観光になり、どういうときには歯止めなき観光資源化、商品化、動物化や全体主義につながるような公共性の摩耗になってしまうのか、公共性というのはそもそも誰によっていかなる手続きのもとに保障されるのかということについては、つめていく作業に課題が残っているように感じられました。このあたりを後でうかがえればと思います。

4 節の実践科学としての観光社会学、公共政策への関与、アクションリサーチ、観光科学教育、いずれも実践科学たるためには重要な項目です。3 つの項目の中ではかろうじてアクションリサーチが私の専門に近いので少しお話をさせていただきます。社会実践としてのアクションリサーチの難しさはまったくご指摘の通りだと思いました。また自分の話で恐縮ですが、私は沖縄のアメラジアンの研究をしていて、アメラジアンスクールの理事をしています。べつにアクションリサーチをやりたくてこうなったのではないのですが、結果として濃い目のアクションリサーチになっていると思います。でも私は、現場のアクターとはかなり価値も規範も違うのです。むしろ研究者が現場と同じ価値や規範になってしまったら、ふたつのアクターとして協働する意味がないのかなと思います。すごく難しくて私自身も模索中ですが、何年たっても現場にとって私は異物であったほうがよりエフェクティブで、私も現場を、自分が担いつつも、研究対象として他者化しつづける。難しいし失敗する局面もたくさんあるのですが、でも、こういう正解のない試行錯誤そのものが、私たちを公共性というものに近づけていく回路なのかもしれないと、このご報告を通して考えるようになりました。

貴重な機会を与えてくださった越智先生にお礼をもうしあげます。ありがとうございました。

## コメント 2

堀　勝彦 †
Katsuhiko HORI

まず観光科学について全くの門外漢である私にこのような立派な研究会でコメントをする機会を与えて頂きましたことを、研究会にお誘い頂きました片岡先生とこの研究会を企画された越智先生に感謝を申し上げます。片岡先生にこの研究会での討論のお誘いを頂いた際、初めは引き受けることを躊躇していた

† 琉球大学法文学部総合社会システム学科経済学専攻

のですが、気軽に引き受けて貰って構わない、また別分野からのコメントも参考となると言われ、それならば勉強させて頂くつもりでとお引き受けした次第です。また私は琉球大学に来てから間もなく、他学部の先生方との交流もしたいという気持ちもありました。

そういう訳で、私のコメントがどこまで有益なものとなるか甚だ疑問ではありますし、また研究会のスタイルもやはり分野が違うこともあり戸惑っている部分もございますが、報告をお聞きして私なりに感じたことを述べさせて頂きたいと思います。

**片岡報告へのコメント**

ご報告の中にあった、メディカルツーリズムの諸形態を従来のように非連続的に捉えるのではなく、諸形態（内容）の連続体として捉えたうえで、治療フェイズと予防フェイズに分類するという視点は大変興味深かった。さらにこの視点を踏まえた上で、メディカルツーリズム実施国をその内容と患者のリスク負担という 2 つの軸を用いてタイプ分けされている点もまた興味深かった。ただ今回の報告では、この分類により新たに何が見えてくるのか、この視点がどのような利点を持つのか、といったことについては十分に見えてこなかった気がする。私の希望としては、分類された各タイプにそれぞれどのような利点・欠点が存在するのか、また日本は既存観光資源多角化グループと分類されているが、それを踏まえて今後日本はメディカルツーリズムをどのように進めていくべきか、ということについてさらに踏み込んで頂ければありがたかった。

またメディカルツーリズムとの関連で混合診療についても言及されていた。片岡先生のご報告の中では、混合診療の解禁によって患者が保険診療を受けにくくなると述べられており、混合診療の解禁には否定的な立場をとられているようだった。しかし、混合診療の解禁とは、これまで一部でも保険外診療があれば全体として自由診療となっていたものを、保険診療と保険外診療の併用を認め、患者側の選択肢を増やすものであり、社会的な便益を高めるのではないか。時間が限られた報告で難しかったとは思うが、混合診療に関して否定的な立場を取られる理由についてももう少し詳しく教えて頂ければありがたかった。

**越智報告へのコメント**

越智先生のご報告は、観光社会学をどのように再定位すべきか、また観光科学は如何に体系化がなされるべきか、という非常に大きな問題関心に基づいたご報告で大変刺激的で興味深く、勉強になった。他方でこのような問題関心に基づく考察は現実の要請からかけ離れ、本末転倒な議論となる恐れがあるのではないかとも感じた。学問とはまず何か明らかにしたい現実の対象があり、そのための思考ツールとして存在している。「どのような学問体系であるべきか」という問題が先にあるわけではない。そこで「観光科学は如何にあるべきか」を考えるとするならば、そもそも現実の問題として何を明らかにしたいのか、またその問題の解明には既存の学問体系では対応できないのか、といった点をまず明らかにしていかなければ机上の空論に陥る危険性があるのではないか、と感じた。ご報告は非常に巨視的な立場から考察をなされたものであり、大変刺激的で興味深かった。簡単に結論が得られるような問題ではないとは思うが、以上の小生の見方も含めて考察をさらに深めて頂けるならば大変ありがたい。

またご報告の中で、先行研究を踏まえつつ「公共性」という概念についても考察を深められていた点も興味深かった。しかし経済学における「公共性」の概念との関連についてはほとんど触れられていなかったように感じられる。経済学では「公共性」とは非競合性と非排除性を併せ持つことという非常に明快な定義・認識が共有されている。様々な立場・分野の学者の間での共通理解を深めることを企図して「公共」概念について再考なされるならば、是非とも経済学上の定義との関連についても考察を深めて頂ければありがたい。